

木食上人と観音さま

「お坊さん！何とかお助けください。この部落さ悪いはやり病が入って来て、みんな困っております。お医者も遠いし薬ありませんで、どうしていいかわかりやせん。どうぞ、みんなの苦しみを救ってやって下さいまし……」と泣くようにして旅僧にすがりつく老母があつた。

今から二百年程前の夏の暑い日の夕暮れ時だった。細い山道を石田の方から中古屋へ向って歩いて来た旅の若い坊さんは足をとめて、老婆の言うことにじつと耳をすまして聞いていた。「そりゃ困ったのう。何とかしなくちやなるまいのう……」と、やさしい言葉をかけて老婆の家の方に向って歩いて来た。「ああ、そうだ。この部落の近くに滝があるというが、どのあたりかのう……」あのむこうの山すそに滝はあるんじやが、お坊さん、滝に何か用かい。「いや、別に用つてはないが、ちよつと見たいものだ……」。「すぐ、あそこだからわかりやすよ。」老婆と若い旅僧はそこで別れて、滝のある方へどんどん歩いて行つた。旅僧ははたちを二つ三つ越えた位だろうか。目のやさしい、どこか気品のあるけだかさの感じられる人だった。旅に疲れた様子もなく、小さな荷物をたずさえていたのが、よその旅僧とちよつと違ふところだった。やがて中古屋の奥にある滝にたどりついたお坊さんは、目をとじて何かを祈るように経文をとなえはじめた。夕暮れとはいえ、むし暑い宵だったが、滝つぼのあたりはしぶきにぬれて涼しそうに感じられた。若い僧は、滝つぼのかたわらに腰をおろし、目をとじたまま、じつと動こうとしません。さつき道で出会つた老婆が、お坊さんを心配して後からついて来たのですが、お坊さんは気づいたのか気づかないのか、振り向きもしない。こうしてお坊さ